# 海部の地理（一八）

## ―宇目町の位置と自然環境―

矢野彌生
（会員・佐伯市中山区）

第１図　大分県における宇目町の位置

拙稿「海部の地理」も、米水津村を終わり、今回から県南の典型的な山間地域で、内陸的な性格を有する宇目町を記述する。記述にあたっては、できる限り地域の姿が見えるように、平易をモットーに、宇目町の地域性を探求してみたい。本稿では、宇目町の地理上の位置や、その自然地理（主として地形・植生・地質・気候）上の特色について、紙数の許すかぎり取り上げてみよう。

**県南の南端に位置する町**　宇目町は大分県の南端に位置しており、東は直川村、西は宮崎県日の影町、南は宮崎県北川町、北は三重町及び本匠村に隣接している。（第１図参照）。県都大分市から約六〇キロメートル、南海部郡の南西部に位置する。

更に、平成二年（一九九〇）三月には三重町の松谷・奥畑両地区間の国道三二六号線バイパスが開通し、宇目・三重両町の中心部は車で約一五分と短縮された。これにより宇目町は三重町との人や物の交流は急激に増加しており、町民の日常の生活圏に組み込まれている。特に、日常生活は、町中心が車で一五分の至近距離となった三重町には、宇目町から気軽にショッピングや食事などに出かけて楽しんだり、医療面でも三重町の病院や薬店など利用する町民が増加している。

歴史は繰り返すといわれるが、宇目町は昭和二十五年（一九五〇）大野郡から南海部郡に編入された歴史があり、国道三二六号線の開通で、昔通りの三重町寄りの大野郡との関係が復活、生活面ではかなり深まってきている（大野郡から南海部郡に編入された主因は交通の便が良いということであった）。

**〈数理的位置〉** 宇目町（役場）の位置[1]を経緯度上からみると次のとおりである。

東経　一三一度三九分三六秒

北緯　三二度五一分一九秒

また、宇目町の四極を経緯度で示すと、次のとおりである。

東端　東経一三一度四四分二四秒、北緯三二度四九分四七秒。

西端　東経一三一度二八分三九秒、北緯三二度五〇分二秒。

南端　東経一三一度三四分一六秒、北緯三二度四五分二秒。

北端　東経一三一度三六分五一秒、北緯三二度五四分二二秒。

また、町の周囲は七九・三キロメートルと長い。

**県下で五番目の広さ**　宇目町の総面積は二六五・九九平方キロメートルで、町域は東西二四・〇キロメートル、南北一四・五キロメートルと広く、県下五八市町村では、大分市（三五九・八六平方キロメートル）・玖珠町（二八六・六〇平方キロメートル）・日田市（二六九・二一平方キロメートル）・九重町（二七一・二五平方キロメートル）に次いで五番目である。

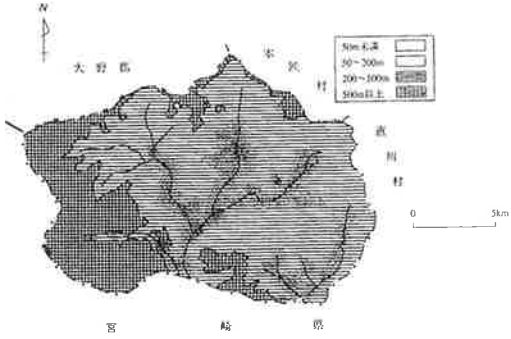
第1表　標高別面積

| 区分＼標高 | 50m未満 | 50～200 | 200～500 | 500m以上 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 面　積 km² | － | 27.82 | 169.45 | 68.87 | 266.14 |
| 構成比 % | － | 10.45 | 63.67 | 25.88 | 100.00 |

（注）国土地理院5万分の1地形図で測積した

『宇目村郷土新建設計画書』（昭和35年）による。

**〈標高別面積〉** いま、宇目町の標高別面積をみると、第1表・第2図のとおりである。すなわち、標高別面積では、五〇メートル未満は皆無で、五〇～二〇〇メートルが全体の一〇・四五パーセント、二〇〇～五〇〇メートルが六三・六七パーセント、五〇〇メートル以上が二五・八八パーセントとなっており、標高二〇〇メートル以上




第２図　標高別土地分布図

が全体の八九・五五パーセントを占めて町全体が高台にあることが分かる。

また、宇目町の地域別面積では、広い林野を有する小野市地区が一七〇・七四平方キロメートル（六二・七パーセント）で広く、重岡地区が九七・一五平方キロメートル（三六・三パーセント）となっている（『村勢要覧』・昭和二六年）。

**〈地目別面積〉**　地目別面積について概観すると、第２表で明らかなように、林野が全体の九三・七パーセントを占めて圧倒的に多く、耕地が一・八五パーセント、宅地が〇・三二パーセントと少ない。しかし、宇目町の耕地面積四九一ヘクタールは南海部郡の八ヵ町村の中では最も広い。

最近の傾向として、農地の転用（宅地・山林・公共用地など）が目立つ。土地は町民にとっては貴重な資源であり、生活及び生産活動の基盤である。一旦変形されると回復は難しいという特殊な資源である。したがって、限られた土地を有効に活用する工夫や自然環境と調和した土地利用が望まれる。(2)

**標高二〇〇メートル**　宇目町の**高原性盆地**は第３図で明らかなように、南西から北東に伸びる九州山地の東端部に位置していることが分かる。町の西、

第２表　地目別面積（平成５年）　（単位：ha, %）

| 区分 | 総数 | 耕地 | | 林野 | | | 宅地 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | うち田 | 山林 | 竹林 | 原野 | | |
| 面積 | 26599 | 491 | 298 | 24797 | 38 | 79 | 86 | 1108 |
| 構成比 | 100.00 | 1.85 | 1.12 | 93.23 | 0.14 | 0.30 | 0.32 | 4.16 |

（『大分県統計年間』平成６年版による）

第３図　大分県の地形区分
（帷子二郎原図）
１九州山地
２大野川河谷平野
３九重火山群
４耶馬渓溶岩台地
５国東半島
６豊前平野
７釈迦ヶ岳火山群

傾山（一六〇二メートル）から南東に新百姓山（一二七三メートル）・夏木山（一三八六メートル）・木山内岳（一四〇一メートル）・桑原山（一四〇八メートル）が屏風の様に連なり、宇目の中心部に向けて急に高度を減じている。

九州山地の主軸方向（北東―南西）に北に柏山（六八一メートル）・城山（一六二メートル）・酒利岳（七五三メートル）、南に板戸山（七四六メートル）があり、その間は北川水系の侵食を除くと四〇〇～三〇〇メートルの低地になり、ともに高度を減じながら北東の豊後水道に没している。この低地部分は一種の隆起準平原、または侵食平坦面で、山地に取り囲まれた盆地となっている。[3] この高原性の盆地は、重岡・小野市の人々の居住地域であり、盆地内には居住地からの比高一〇〇～三〇〇メートルの丘陵地が広く分布している（第４図参照）。

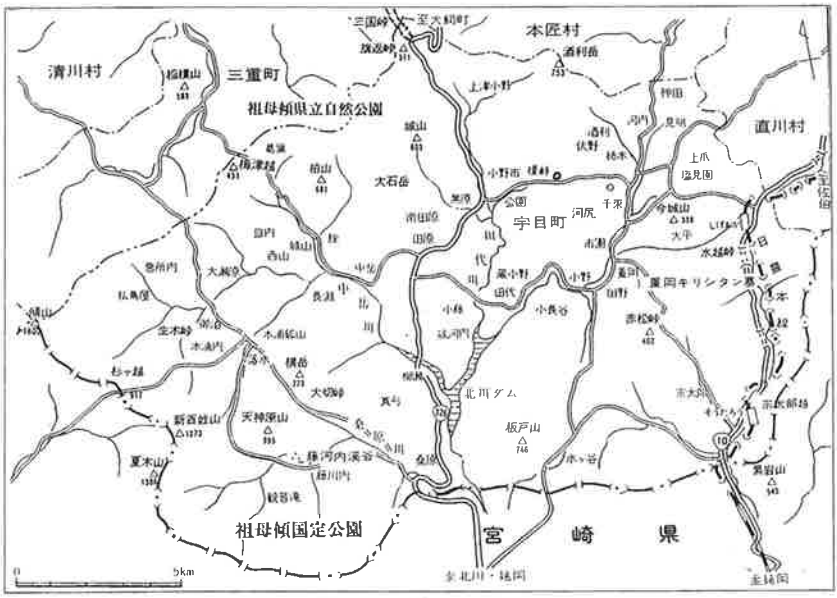
〈隆起準平原の地形〉

前にも述べたように、宇目町の低地（盆地）の部分は、隆起準平原（準平原が隆起して高度を増したもの）、または侵食平坦面である。

重岡の盆地

小野市西南部に天神原山（九九五メートル）があり、その山頂部は地形図（五万分の一）をみても明らかなように、西南から北東方向に緩傾斜の平坦面をもち、北西と南及び北東に急な断層崖が発達している傾動地塊[4]である。平坦面の表層は変質した石灰岩で、隆起準平原の名残である。

このほか、山頂に平坦面をもつものは西方の鷹鳥屋（五〇〇メートル）、板戸山から水ケ谷の六〇〇メートル、更にその南




第４図　宇目町全図

方宮崎県の黒原山付近の七〇〇～八〇〇メートル、鬼目山の一二〇〇メートルなどにみうけられる。これらは、九州山地東北部における隆起準平原の遺物を意味する。(5)

〈北川水系に属する宇目町の河川〉　宇目町内の河川は北川水系に属しており、傾山（一六〇二メートル）付近に源を発した諸渓流は中岳川となり、酒利岳（七五三メートル）・三国峠（六六四メートル）に源をもつ諸渓流は市園川・田代川を形成し、南流している。これらの河川は町中央南部で合流し北川となり宮崎県北川町に注いでいる。また、町東部山地の大原越付近に源をもつ鐙（あぶみ）川は南流して北川に合

市園川（平成８年４月）

中岳川（平成８年５月）

北川ダム

流している。

北川は全長五一キロメートル、流域面積は五八九平方キロメートル、一級河川。南田原に県営北川ダム（昭和三十七年完成・堤高八二メートル・堤長一八八・三メートル・総貯水容量四一〇〇万立方メートル・大分県初のアーチ式ダム・最大出力二万五一〇〇キロワット）、宮崎県側に県営北川発電所がある。

北川水系の特徴は九州山地を流れる球磨川と同じく先行川（河川の流路が決定された後に隆起して生じた山地を横切って流れる河川が形成した谷）の性質をもつことである。九州山地の隆起の速度よりも北川の侵食作用が大きいため、元の流路を維持しながら深い谷をうがち、典型的なV字谷を作っている。それを支えたのが、九州山地の南東斜面が太平洋から流れ込んでくる大量の湿気を雨に替え、豪雨地帯を形成しているからである。

従って、流域は狭く、流路は短くても、急勾配を一気に流れ下る多雨の雨で、暴れ川となり易いのである。北川もいちはやく洪水調整・電源開発を兼ねた北川ダムが完成したのである。(6)

**〈九州屈指の山岳景観―壮年期の山容を示す傾山〉** 四皇子峰ともいう。宇目町・三重町・緒方町・宮崎県臼杵郡日之影町との境・標高一六〇一メートル。山頂は本傾・後傾・前傾の岩峰群からなっている。

特に、前傾には五葉塚・二ッ坊主・三ッ坊主・吉作坊主などの一〇〇メートルを越す大障壁の岩峰群の豪壮な山体がある。標高一一〇〇～二二〇〇メートルから上部はブナ、下部はツガの原生林となる。西に九折越がありここか

壮年期の山容を示す傾山の岩峰
（『広報うめ』平成6年4月号より引用）

ら登山路がついている。祖母傾国定公園に属する。

九州本島では、登山や観光の対象となっている山地は祖母・傾をはじめ、九重・阿蘇・霧島・雲仙・由布・鶴見などがある。しかし、祖母・傾山地を除けばほとんど成立年代の比較的新しい火山である。それだけに開析（風化・侵食などの外部からの働きによって、地表面がけずられて複雑な起伏をもつようになること）の進んだ壮年期の山容を示す祖母・傾の存在価値は大きい。九州屈指の山岳景観を示す山地である。[7]

山頂からは、祖母・九重・由布・鶴見・大崩などの山々が展望できる。

藤河内渓谷（ヒョータン淵）

〈無数の甌穴がある藤河内渓谷〉

「ふじかわち」ともよみ、藤川内渓谷とも書く。北川支流の桑原川上流の藤河内にあり、約八キロメートルの渓谷。その流域は地質年代の古い花崗岩地帯で、河川水中の溶解成分量も少なく清澄である。

観音滝（高さ73.5m）
（『祖母傾山群』大分県・昭和30年より引用）

渓谷は白い花崗岩よりなる無数の甌穴（ポットホール、またはかめ穴ともいう。河床や河岸の硬い岩石の表面にできる円形の深い穴）・観音滝（高さ七三・五メートル・標高約七〇〇メートル・木山内岳の中腹）をはじめ、大小多数の滝がある。平家落人伝説もあり、秘境性に富み、観光地として、県最南端の温泉「藤河内湯～とぴあ」がある。渓谷は祖母傾国定公園に属する。[8]

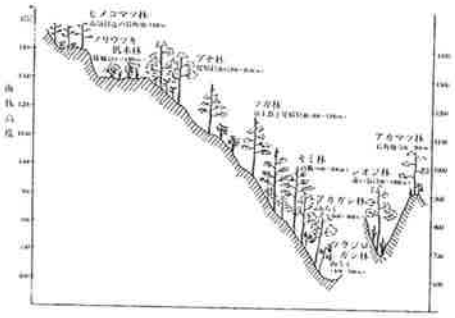
**減少する原生林**

わが国の原生林は保護を訴える人々があるる一方、急速度で伐採が進んでいるといわれる。大分県でも、これまで貴重な原生林が伐採されてきたことが報告されている。ここでは、大分県の調査報

告書[9]をもとに、祖母・傾地域の原生林の概況をのべてみたい。

〈祖母・傾の原生林の森林構造〉　地質的には西南日本の外帯に属しており、典型的な垂直森林帯が発達していることと、尾根や谷に土地的極盛相をなす森林が成立していることが植生の特徴とされている。

いま、この地域の原生林の森林構造をみると、第5図のとおりである。第5図に示すように、山麓から常緑広葉樹林に属するウラジロガシ林、アカガシ林にはじまりその上部の標高九〇〇から一二〇〇メートルには、低山帯の代表である常緑針葉樹林帯のツガ林が山腹一帯を帯状にとりまいている。このツガ林は九州特産のもので学術上貴




第5図　祖母・傾地域原生林の森林構造
（『祖母・傾地域の自然環境保全調査報告書』大分県〈昭和51年〉による）

ハリモミ林（傾山）

ブナ＝スズタケ群集（傾山）

ヒメコマツ林（傾山）

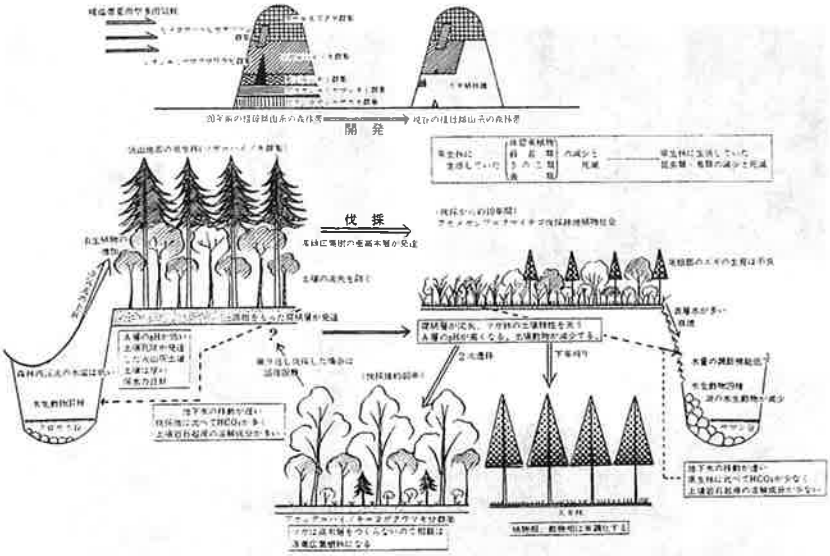
ツガ＝ハイノキ群集（傾山）

重である。

一二〇〇メートル以上の山地は、太平洋岸気候域の冷温帯湿潤気候の極盛相であるブナ林がある。更に、山頂一帯の稜線の岩角地帯にはヒメコマツ林がある。谷には特徴的なシオジ林がみられ、山腹の岩角地帯にはアカマツの天然林が非帯状に発達している。

〈原生林伐採とその背景〉　大分県の報告書では祖母・傾山系の原生林伐採によっておこった動物相や植物相の変化、あるいは植物相の変化、あるいは植物社会や自然環境の変化を総合的にとらえて、図式を示してまとめている。特に、最近の二〇年間における祖母・傾山系の森林破壊の状態を概念的にあらわしたものが第6図である。

昭和三十一年（一九五六）当時の調査では左図のような森林帯であったのが、現在は右図に示すように開発が進んでおり、ウラジオガシ＝サカキ群集、シオジ＝ミヤマクアワラビ群集は伐採によってほとんど消滅してしまった。また、九州だけ、それも祖母・傾山系で最も発達していたツガ＝ハイノキ群集も、生育地面積はおよそ半分に減少したことが報告されている。第6図の中央の図は、ツガ＝ハイノキ群集を伐採した場合の植物社会の二




第6図　原生林伐採による生態系変化の概念図（須股博信原図）
（『祖母傾地域の自然環境調査報告』・大分県〈昭和51年〉による）

次遷移を模式図にしたものである。この図で明らかなように原生林の伐採が生態系に重大な悪影響をおよぼしていることが分かる。

〈祖母・傾山系の原生林伐採の背景〉　『大分合同新聞』（昭和六十年二月十九日号）は、祖母・傾山系の原生林伐採の背景について、

祖母・傾山系の国定公園昇格は、西日本最大の原生林とそこに生息するカモシカなど貴重な動植物の存在が大きく作用した。だが、昭和二十二年（一九四七）に発足した「国有林野事業特別会計」（独立採算制原則導入）と、その後の一連の営林事業の見直しが原生林を一変させた。

カモシカ（九州大学土肥昭夫氏提供）

戦中、戦後の乱伐で荒廃した国土・森林は立ち直る間もなく、昭和三十年代の住宅ブームのあおりを受けることになる。三十三年には、「国土林野生産増強計画」、次いで三十六年（一九六一）、「木材増産計画」が策定された。

ところが、木材増産は全国的な規模で丸刈り方式の効率的な伐採を進める結果となり、乱伐と林道建設などによる森林の荒廃はますます広がっていった。こうした状態を憂える自然保護団体の間で、〝原生林を守れ〟という声が高まってきた。

昭和四十八年（一九七三）になって林野庁はようやく国有林野間で施業を一部で制限したものの、足場の良い主要な原生林は失われた後だった。

と、伝えている。

〈藤河内渓谷の原生林の現状〉

傾山系の藤河内渓谷の原生林の現状についても、『大分合同新聞』（昭和六十年二月十九日号）は、

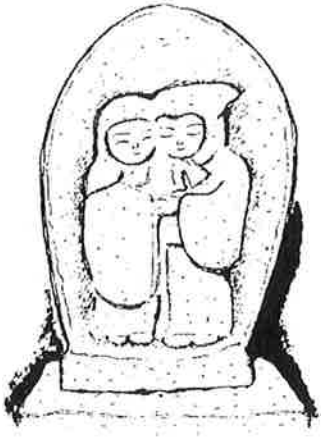
宇目町藤河内渓谷では、戦後三十五年から四十年にかけ、第一次の伐採が行われ、四十五年以降、現

林道造成と植生の破壊
（観音滝の上の林道と、土砂のたれ流し〈標高800m〉道下は伐採せずとも森林は壊滅する〈昭和47年10月〉・大分県資料による）

在まで伐採が続いている（延岡営林署の説明）。この第一次伐採当時のもようを宇目町内の古老は次のように語る。〝昭和三十年初め藤河内上流に林道が出来てからは有史以来オノが入ったこともない山が次々に切られていった。昔と違い伐採も機械化され作業はようはかどりました〟。

人力だけが頼りの昔ながらの林業に携わってきた古老には驚くようなスピードだったようだ。〝昔は水害など防ぐため、尾根や谷筋は二〇パーセントずつ、きちんと切り残しましたよ〟とも付け加えた。佐伯山の会が現地を調べたところによると、宇目町内の杉ヶ越の峠から夏木山・桑原山などにかけて主要な尾根筋では目ぼしい森林の八〇パーセント以上がこれまで切り尽くされている。

と、伐採で消えていった原生林の状況を伝えている。

現在、全国的にみても原生林の多い国有林野事業は荒廃が進んでいるといわれており、採算性を求める事業なのか、環境保全が目的なのかを見直す必要に迫られているといえよう。

（以下次号）